何が失われたのか？

――「帰還困難区域」飯舘村長泥住民の聞き取りから――

埼玉大学名誉教授　福岡安則

1　目的

2011 年の 3.11 に起きた東日本大震災と大津波は，東京電力福島第一原発の事故を引き起こした。飛散した放射性物質が降り注いだ地域では，多くの住民が故郷を追われた。余儀なくされた《故郷喪失》と《他郷暮らし》は，かれらから何を奪ったのか？　地域の「復興」と言い「再生」と言うとき，《失われたもの》が何であったのかを押さえておかないかぎり，外部から持ち込まれる復興・再生のデザインは，当事者の望むものとは乖離したものとなろう。――まずは，何が失われたのかを明らかにすること，それが本報告の目的である。

2　方法

データとしては，福島県飯舘村のなかで唯一「帰還困難区域」の指定を受けた長泥地区を追われ福島市内や近隣市町村で避難生活をおくっている人たちから聞き取りした《ライフストーリーの語り》を用いる。わざわざライフストーリーと断るのは，事故が起きた時点以降にのみ焦点をあてた聞き取りでは，かれらと故郷との関係を十分には把捉しえないと考えられるからである。わたしたち（黒坂愛衣、福岡安則、佐藤忍）がこの聞き取り調査を実施できたのは，幸運にも，地元委員 7 名（区長など地元役員）と外部委員 10 名（研究者，新聞記者，写真家など）からなる「長泥記録誌編集委員会」に加えてもらえたからである。わたしたちが担当した聞き取りは，2015 年 5 月から 10 月に 16 セッション実施された（複数の語り手の場合があるので人数ではもっと多い。その後も補充調査をしている）。その語りのかなりの部分は『もどれない故郷 ながどろ――飯舘村帰還困難区域の記憶』（2016 年 3 月刊，芙蓉書房出版）として出版され，朝日新聞（2016.3.11）の「天声人語」でも取り上げられた。

3　結果と考察

> われわれは，生まれ故郷を喪失した。これは，日常生活への慣れ親しみを喪失したということである。われわれは，仕事を失った。これは，この世界でなんらかの役に立っているという自信を失ったということである。（中略）〔そして〕われわれの私的関係が切り裂かれた……

これは，ハンナ・アーレントの言葉である（1943=1989,『パーリアとしてのユダヤ人』未來社）。原発事故で故郷を追われた長泥の人たちの体験は，このナチスに追われた亡命知識人の体験と，枠組みとしてはまったく同型である。もちろん，その体験の内実は異なるであろう（当日の報告ではそのあたりを詳しく述べたい）。亡命知識人たちは，アメリカの大学人に暖かく迎え入れられることでその生存と活躍の場を獲得できたけれども，長泥の人たちの場合には，事はそうはいかない。

長泥からの避難者といっても，年齢層や性別によって，語りのトーンが違う。復興・再生のプランから〝見捨てられた〟と言ってよい長泥の（元）住民のあいだでも，60 代の男性たち（昔風に言えば〝家長〟の名にふさわしい人たち）が最も，長泥への帰還の望みを口にする。とはいえ，その内実は，いつの日にかの帰還を遠望しつつ長泥の墓の守りだけはしたいという儚い望みに近い。もっと年上の超高齢者たちの場合には，すべてを失ったとしか言いようのない喪失感が際立つ。一方，自らの農の技と体力に自信をもつゆえに避難先で土地を手に入れて再出発する働き盛りの男たちもいる。女たちは，どちらかといえば，長泥には拘らずに次世代の未来にかけているようだ。総体としてみたとき，そこからは，「コミュニティの再生」の可能性は，そう簡単には見てとれない。そのとき，社会学には何ができるか？　社会学者はどうすべきか？ ――わたし自身に問われている問いである。